

信州緑化フェアの女性技能競技大会に参加して

近畿ブロック 島田 遥（庭や遥）

大会を終えて、改めて自分自身を振り返り感じたことを書かせていただこうと思います。

普段の私の業務内容は管理、施工がメインの小さな造園屋を営んでいます。この業界に入って、特に現場での従事者に女性が少ないのがわかりました。男性社会であるという認識が強い中でよく耳にすることがあります。「**女性らしさを仕事に活かせば**」ということです。私自身もそう思う部分は大いにあります。ですが、残念ながら私の性格は一般的なイメージの女性らしさとは程遠く、木に登ったり、土を触ったり、パワーでせめてみたり、交戦的であったり…。仕事内容と自分の性格がうまく合致し、現場で困ったことは今までほぼありません。現場仕事もすごく好きでバリバリ働いてばりばり稼ぐのが楽しくてたまりません。女性造園技術者の会の入会の誘いを受けた時も私は違うのではないかと少し思いました。それでも女性としての実際の造園業界での立ち位置、全国の女性造園技術者の皆さんの気持ちや技術を学ぶ機会ができたことの嬉しさで入会させていただきました。

そんな私は競技大会に参加し始めた最初の頃は勝ちたいという気持ちが前面に出ていましたし、作品では技術を表に見せつけるようなことばかりをしてきた気がします。それは私が一番得意なことをただ全力でしているだけになっていました。

機会のあるときには講習会や競技会に参加を続けてきました。その中で様々な人と関わり学ぶことで、最近では気持ちに変化してきたように思います。最近のイベント参加理由もその一つです。楽しそうだと思う期待感と普段の仕事では伝えきれない造園の楽しみや喜びを表現する場所だと思い、日々の技術研鑽をエンターテイメントに繋げてくれ、また模索し続ける材料となると感じていたからです。結局のところ私は遊ぶのが大好きなんだと思い出しました。今思うと初心にかえっただけなのかもしれませんが…。少し肩の力を抜い

て参加できるようになってきました。

そんな自分自身に気がつき自分らしく楽しく庭と向き合いたいと思い今回の女性技能競技大会ではリラックスし楽しむことを第一目標に参加させていただきました。

コンセプト『しっぽのある家族✕庭』ということで動物達と過ごす時間を連想する庭を作庭することとしました。コンセプトを考える時も『楽し



む気持ち』を形にする為に自分たちが身近に感じて連想しやすいものから発想を得ました。少し肩の力を抜いて楽しんで作庭できたこともあってか、今大会ではある意味“女性らしさ”も表現できたような気がします。

この大会に参加して、大会参加者の皆さん、関係者の方々のそれぞれの自分らしさを肌で感じる事が出来ました。女性ばかりの大会に初めて参加して思ったことは、これまで参加した他の大会と比べて競技会の前後の時間も含めて全体的に空



気感がやわらかく感じました。また、学生、社会人問わず、いち技術者として参加し全力を出して、お互いを認め合った大会でした。男性の多い業種だからこそ、女性だけの大会は技術者同士の交流の場にもなり、参加させていただいてとても有意義な時間を過ごせました。

ありがとうございました。



女性技術者の魅力のパフォーマンス

東京ブロック 大橋 尚美

造園業界では初めての女性造園技術者技能競技大会が、2019年4月27日、28日に第36回全国都市緑化信州フェアにて行われた。(主催：日本造園組合連合会)大橋はこの大会の審査を担当、初の試みに2日間でのどのような庭ができるのか楽しみに当日に臨んだ。

2人1組の出場者チームの確保に困難を極めたと聞いていたが、9組が出場。造園のプロ6組(北海道、神奈川、長野、滋賀2組、香川)3組は学生(東京農大、長野県立須坂高校、奈良県立磯城高校)。経験も年齢も違うチームが、4×3mの区画を使って各々の描いたコンセプトの庭を時間内で実現させた。

使用材料は皆同様で、競技前日公開され、その材料から競技へ向けて作庭の作戦を練るのである。競技時間は2日間9時間、決してゆとりある時間ではない。各チームはすでに材料の下見で作庭の段取りをつけている。

■庭づくりを見せる

この大会の魅力は完成庭を見せるのではなく、作庭の様子を見せ、競技していくスタイルで、来場者も作庭の技に関心、スケッチと実物を見てイメージを膨らませる、そして来場者も人気投票で参加する。この方法は競技者にとっては緊張感が増すが、女性造園技術者の仕事の認知の意味では効果が高い。また来場者も施工者に質問や応援など声がけしやすく一体感がでる。特に初日の冷たい

雨の中で無心に仕事する姿は感動的であった。

■物語を魅せる

作庭はそのテーマ性やコンセプトをいかに具現化し、利用する人や鑑賞する人にその物語を感受してもらうものである。今回のプロチームは[癒し・健康・福祉][猫や鳥、生き物と楽しむ][信州の旅の発見]など、日常生活の癒しや発見を優しい目線、柔らかな感性でデザインしていた。これは男子の大会では出てこないコンセプトだ。大学生は「雨神様」をテーマに石龍表現に挑戦、高校生も[故郷の風景]を丁寧に描いていた。プロの手際の良さは流石、時間を見ながら、軽く仕上げ、こだわりは熱意をもって仕上げる。こうしたプロの中で高校生の2組は学校の実習通り淡々と石やレンガを積み、時に大胆に動く、その熱心さと我慢強さには感心、この女子達が未来の造園界を支えてくれるのかと思いととても頼もしく感じた。

■魅力の技術をみせる

審査はプロ、学生も視点は同じく、コンセプトの着眼点と、それをいかにデザインし、作庭したかを審査した。金賞のペットと共生する庭は、ペットの動きの面白さやそれを見守る人



↑すぐ横にお客様が.....

の目線、それが人の癒しにもなる工夫の仕掛け、そして施工の手際の良さを評価した。その他の作品も限られた時間の中で、よくここまで仕上げたと感動した。全般を通して、配石や竹や木材のデザイン、そして草花の扱いなど、女性ならではの魅力的なパフォーマンスを感じた大会であった。

今後も女性造園技術者の仕事の情報公開の場として大会が継続され、本会員が多数出場できることも望みます。



↑「自然の命に触れる、福祉の庭」



「北アルプスの贈り物に想いを馳せて」↑

第17回 日比谷公園ガーデニングショー2019に参加して

関東ブロック 時松 淳子（有限会社季織苑）

2019年、日比谷公園ガーデニングショーのガーデン部門に参加しました。昨年は同部門で国土交通大臣賞を受賞しましたので、今回は私が担当することになり、いつもと違うプレッシャーがありました。2018年は力強くバランスの良い端正な空間、今年はさりげない静かで穏やかな弊社らしい空間を目指しました。オリンピック控え全体的に日本的な表現の傾向だろうと考えましたが、その流れの中でも私の志向する自然な落ち着いた庭を作りたいと思い、結果を取るか自分の方向性を取るか悩んだ末の庭に、**ガーデン部門1位の東京都知事賞**を頂けたことに嬉しさはひとしおでした。2013年の第11回から参加を始め毎年続けることは、結果を意識しながらも社員のモチベーションアップ、スキルアップにとって大変重要なものと思っています。平時は和風な、洋風な、モダンな、ナチュラルな等、そしてエクステリアも同時に設計施工していますので、造園における弊社の作風、個性ってなんだろうと思いつておりましたが、最近ではコンテストに参加すると「季織苑らしい」と言って頂けるようになってきました。会社を始めて19年、これからも毎年チャレンジ精神で参加を続けて行きたいと思っています。



なごやの街路樹考

中部・北陸ブロック 久保 恭子

街路樹は、街に彩りやうるおいを与え、良好な生活環境をつくるとともに、防災や生き物のすみかなど多様な機能を持ち合わせています。とは言うものの、毛虫に落ち葉、大径木化に伴う根上がり等で、街の嫌われ者になっているという一面も、残念ながら現実です。こうしたなか、今年度、名古屋市では「地域に愛される街路樹づくり」を目指して、街路樹の魅力を広く発信・共有することを目的とする、複数の取り組みが行われました。通常、私は公園管理に携わっていますが、この「なごやの街路樹」の企画に、縁あって「一(いち)参加者」として接する機会を得ましたので、ご紹介します。(ブロック活動でなく個人活動)

■8～10月 写真&絵画コンテスト作品募集(同期間に「街路樹管理アイデア大募集」も)

複数の応募方法があるなか、恐る恐るインスタグラムを開設し「#なごやの街路樹」で投稿。馴染みのまち

の見え方が次第に変化する面白さを実感。そして、同一ミッションに対する人々の好意的な反応が、同時進行的にわかるというのが面白く、妙な仲間意識も芽生えたりして。

■8月5日 樹木医と歩く!! 街路樹ツアー
森や公園の自然観察とは一味違う街路樹ならではの見方、わかり易く楽しげに話す樹木医先生、意外にも幅広い参加者、和やかな雰囲気、樹木診断シートを手に樹木を見上げたり触ったり、老若男女が「診断体験」を好奇心いっぱい楽しんでいく様子に、心が和みました。



■11月下旬～12月下旬 コンテスト作品展示
(11月22・23日 市民投票)

小規模ながらも壮観。写真も絵画も思いのこもった素敵な作品。苦情ばかりを受け取る日常にいると気づけない、さまざまな人の思う街路樹の好きなところ、そしてそれぞれの良さ。多くの人の目にふれてほしいと思えました。沢山の苦情を受け取ることが日常の人々にも。

■12月15日 街路樹シンポジウム

～地域に愛される街路樹づくり～

基調講演とパネルディスカッションのほか、街路樹管理アイデア発表・コンテスト表彰式、さらにはそれらのパネル展示など、8月からの取り組みがきちんと編み込まれた内容。壇上の方々のお話はどれも、ためになったり楽しかったり。新発見をした人も多かったでしょう。

12月のシンポジウムが複数の取り組みの終結点でしたが、出発点になった人は少なくないと思います。「違う季節はどんな様子だろう、場所や樹種を違えて樹木医先生の話聞いてみたい、花だけでなく幹や根も気になってきた」など。気軽に親しめる内容で、いつか続編をと思います。また、管理畑に常駐する(苦情ばかりを受け取る)人々や、街路樹に苦勞をしている沿道の方々にも、魅力やアイデアが「発信・共有」され、困りごとを和らげる妙案も生まれてほしいと思います。私は、出不精解消にもなる「#なごやの街路樹」を、もうしばらく続けます(^-^)



10/5: 樹木医と歩く!!街路樹ツアー

11/22・23: コンテスト市民投票

2019年5月チェルシーガーデンショーで金賞受賞

佐藤 未季

初めまして。北海道・十勝を拠点に公園や観光庭園、個人邸のお庭を設計しています佐藤未季と申します。2019年5月に英国で開催されたチェルシーフラワーショーに、同じく十勝在住のランドスケープデザイナー・柏倉一統さんと「漢方の庭」を出展し、金賞を受賞しました。



(撮影：白井達也)

私達が、出展した「漢方の庭」は、北海道で育つ、体に良くて薬効のある植物と魯班尺というアジアで古来より設計に使われていた風水の寸法でデザインされた「人々の幸せと健康を願う庭」でした。

設計士も施工者も苗を育ててくれる生産者も管理者も、きっと緑に関わる人全てが願うこと、緑の力で庭や公園に来てくれる人がHappyになったり、リラックスしたり、そこから気持ちの良いコミュニティが生まれますように！そういう願いを、古くから日本人が使っていた「薬草」と「風水」、そして、北海道で育った私達のアイデンティティを含めて作庭しました。庭園内には、北海道の雪解け水の流れを模した小川が

流れ、北国の春の雪解けの喜びと、ミネラルを含んだ雪解け水が大地に染み込み植物を通じて人を健康にするという自然の恵みの循環を現しました。そして、地域の人達が仲良く緩やかにつながれるコミュニティーガーデンの一角をイメージして、居心地の良い庭を目指しました。大きく広がる大地と空の下、緑豊かな十勝に育った私達が、自然や暮らしの中や造園の先輩達から学んだことを注ぎ込んだ「漢方の庭」は、国境を越えてたくさんの人々に癒しと感動を届けることができました。

審査員長からは「君たちの庭は、Solid Gold（確かな金賞）だよ」と、会場で出会った沢山の人間からも「初出場で金賞は、本当に特別なこと。おめでとう！」と声をかけていただきました。でも、このゴールドメダルは、私達と「漢方の庭」施工チームだけでは到底手に入らなかったものです。実績と知名度と経験の浅い私達には、圧倒的に「お金」と「情報」と「人脈」が不足していました。そもそも大会に出場するためには、デザイン審査だけではなく、現地で実際に作庭す



(撮影：白井達也)

るための渡航費、宿泊費、施工費など合わせて2000万円を超える費用が必要でした。通常1社もしくは、少数の大企業や政府・地方自治体がスポンサーになることが多いのですが、私達の場合は協力を得られずに全滅でした。

無計画と無謀を痛感しながら、最後の手段とSNSで助けを求めました。それを見た師匠、先輩、オープンガーデンの会や北海道ガーデン街道の皆さん、友人、知人がそれぞれの大切な人脈を使って支援の輪を広げてくれました。最終的に450社・名以上の北海道内外の企業や個人スポンサーからのご寄付のおかげで出場を果たすことができました。

「挑戦する若者に」「頑張っ」と、100名を超える個人や企業の善意の寄付による出場は、大会始まって以来のことだと英国の新聞やメディアでも大きく報じられました。

助けていただいたのは、お金と人脈だけではありません。過去2回、大会に出場経験のあるガーデンデザイナー野田珠晃さんからご連絡をいただき、ご自身が悔しくも金賞を逃した理由や注意点など、経験者でしかわからない情報を惜しげもなく教えていただきました。「なぜですか？」とお伺いしたところ「チェルシーの知名度がもっと上がって、業界全体が盛り上がったら面白くて、社会にも良いから」と。私達は、そうした先輩達やたくさんの人達のおかげで出場することが出来ました。なので、工事が始まってはまだ必要な植物の半分しか調達できず、クッキー片手に他のデザイナーに納品に来た苗のトラックを追いかけて交渉したり、注文と全く違うサイズの材料に合わせて設計変更を現場で繰り返すことがあっても、必死に食らいつくことができました。

隣で作庭していたフィンランド出身の女性デザイナーさんには、「現場でデザイナーの一番大切な仕事は、みんなにお茶をつくることと、笑顔でいること」と教わりました。チェルシーの会場内は、仲間のように、各庭のデザイナーも施工者も助け合いながら最上のものを作り上げようとする崇高だけど一人じゃない空気であふれていまし

た。すっかり戦友になった彼女は、2020年にも連続出場を果たしつつ、現在、未来の子供達に良いバトンを渡したいからと「笑顔」で国際的な緑化基準よりさらに厳しく「緑と人をファースト」に据えたフィンランドの都市緑化基準をヘルシンキ大学と官庁と協力しながら作成しています。

私達は、残念ながら2020年も書類審査に合格しRHSから特例の書類をいただきながらも、金賞の実績をもとに大企業に絞ったスポンサー活動に力及ばず失敗し、今は再び2021年に向けての挑戦を始めています。

これからも、この奇跡のような体験と世界的な舞台上で培った経験を設計の仕事を通じて、「植物の力を借りて、人を幸せにする」ことを目指して一步一步頑張ろうと思います。一番開けるのが難しい最初の扉と一緒に開けてくださったたくさんの方達がいたこと、このようにお伝えする機会をいただきましたこと全国女性造園技術者の会のみなさま、本当にありがとうございました。



(撮影：柏倉一統)

佐藤未季 未季庭園設計事務所

単身渡英、名門 Inchbald School of Garden Design にてガーデンデザインを学ぶ。イギリスではヒリアガーデン、アダム・フロストデザインにて研修。

【実務経験】

北彩都ガーデン植栽設計(旭川市)、十勝ヒルズアニーカの庭、十勝ヒルズリニューアルデザインランドスケープデザイン(幕別町)、六花亭美術村ガーデン管理コンサルティング・植栽アドバイザー、等